



図書館だより

第10号 平成18年2月発行
弓削商船高等専門学校図書館

目次

特集 おすすめの一冊	3
平成17年度読書感想文優秀作	1
平成17年度学生図書委員紹介	1
寄稿「読書を楽しむ」—石橋館長—	2
学生に図書館を活用させる授業— アンケート調査結果	5
平成16年度図書館利用状況	5
専攻科コーナー —新たに設置—	6
編集後記	6



図書館の横の桜です。構内の桜並木は有名でお花見の季節になるとたくさんの人が訪れます。(撮影：15 松浦 悠)

平成17年度読書感想文優秀作

- | | |
|---|---|
| <p>S1 木本 雄介「甲子園への遺言」を読んで
熊谷 慧「ボーイズビー」を読んで
近藤 聖志「プロジェクトXリーダーたちの言葉」
を読んで
牧本 大「吾輩は猫である」を読んで</p> <p>M1 井川 侑耶「モモ」を読んで
池田 篤「海底二万マイル」を読んで
越智 誠「老人と海」を読んで
福井 千仁「博士の愛した数式」を読んで</p> <p>I1 笹井 愛実「大東亜戦争報國隊引率教師の日記」
を読んで
西中 健太「バッテリー」を読んで
宗岡 和希「天竺漫遊記」を読んで
吉本 圭佑「坊ちゃん」を読んで</p> | <p>S2 浅海聡一郎「バカの壁」を読んで
草加大司郎「いま、会いにいきます」を読んで
村上 聖也「走れメロス」が語るもの
渡邊 貴幸「蹴りたい背中」を読んで</p> <p>M2 岡野 真也「木のいのち 木のころ」を読んで
兒玉 成生「存在の耐えられない軽さ」を読んで
田中 敏徳「毎日が贈りもの」を読んで
和木坂一太「世界がもし100人の村だったら」
を読んで</p> <p>I2 赤瀬 沙耶「ころも」を読んで
池上 祐也「キノの旅」を読んで
池本 理奈「ビタミンF」を読んで
守谷 哲一「ちいさなちいさな王様」を読んで</p> |
|---|---|

平成17年度学生図書委員紹介

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| S1 中田 禅 | M2 上田 真 | I3 澤田 和也 | S5 山口 照実 |
| M1 矢口 竜也 | I2 浜原 周平 | S4 中橋 勇貴 | M5 石井 良一 |
| I1 二宮 静香 | S3 岡野 真也 | M4 清水 啓介 | I5 越智 文都 |
| S2 村上 明憲 | M3 福本 聖 | I4 谷口 拓哉 | |

読書を楽しむ

図書館長 石橋 洋二



日ごろ、学生の皆さんに読書を勧めている立場柄、読書について何か書く役割が回ってきた。読書一般から適当なテーマを選んで書く知識はない。したがって、自分の読書経験をもとに書くしかない。と言っても、几帳面で真面目な読書はしてこなかった。ありふれた読書である。ここでは、ありふれた読書なりに、読書の楽しみといったことなどについて、思いつくままを書かせて頂く。

どんな読書をしてきたか思い起こしてみた。小説類についてである。流行作家ものやベストセラーものに執着した経験はほとんどない。たいていは図書館や本屋で何気なく手にした一冊一冊の繋がりである。言ってみれば、芋づる式読書。芋づる式読書の‘つる’には、作家で繋がる‘つる’や、歴史ものや戦記ものなど特定のテーマで繋がる‘つる’と、いろいろある。なかには、読書によってさまざまな連想が広がり、これがヒントで繋がる‘つる’がある。たとえば、水上勉の「一休」を読んで、松枝茂夫「陶淵明全集」、吉川幸次郎「中国の知恵」、中野孝次「論語」といった具合にである。

さて、芋づるには種芋があるように、芋づる式読書には種本があるように思う。種本とは次から次へと読書の輪を広げてくれる本。読書にはずみをつけてくれる本のことである。種本とはどういう本だろう。考えてみた。種本、一口で言えば共感を与えてくれる本。ここでは、共感の強さの程度にポイントがあるように思える。その強さの程度とは、化学反応の開始条件に似て、連鎖の連鎖を引き起こす強さ。ある閾値を超える強さの共感を与え、連想的に読書欲をかきたてる本が種本となる条件、と考えてみた。種本との出会いは読書を豊かにしてくれる。これからも、種本との出会いを大切にしたい。

次に、読書の楽しみについてである。なんと言っても、趣味を題材にした小説類は無条件で楽しめる。作品の世界—自分の技能や情熱のようなものを遥かに超えた別世界—を自分自身の体験を通して共有できるからであろう。自分の趣味、ランダムに三つあげると、

里山歩き、つり、囲碁。これらについて、私なりの一冊を選んで、作品の魅力などについて、少し紹介させて頂く。

まず登山。山を題材にする作品は多いが、一冊をあげれば、田部井淳子「エベレスト・ママさん」。世界ではじめて、エベレスト登頂に成功した女性クライマー。彼女が山登りをはじめた青春時代からエベレスト登頂までが、語りかけるような平易な文章で綴られている。先輩クライマーの墜落死や彼女自身の雪崩遭遇の体験が淡々と描かれる。そのぶん余計に、死と隣り合わせの登攀のすごさを感じる。一方、別の作品には、気楽に読ませる世界各地の山々が登場する。私が登った北関東や上越の山に出会うと、何となく親しみを感ずる。また、彼女の話の直接聞く幸運があった。このことが、作品をいっそう身近なものとして、楽しく読ませてくれる。

次につり。釣師、井伏鱒二がある。が、ここでは、ヘミングウェイの「老人と海」をあげたい。学生時代から英語で読む小説の一冊。読まれた方も多いと思う。カリブ海での、老漁夫の孤独なつり物語である。八十数日目にやっと掛かった大魚、マカジキを一人で仕留める迫力はすごい。作者自身のつり体験を通して、情景が精緻に描写される。一語一語が選抜抜かれて、文章が美しい。読み進むごとに、映画の一コマ、一コマを見ているようである。何度読んでも飽きない一冊である。

最後に囲碁。これはずばり川端康成の「名人」。第21世名人本因坊秀哉の引退碁の様子が、文豪の手で描かれる。この碁は、名人が病を押して、半年近くにわたって打ち続けられた。名人の負けられない引退碁。まさに命をすり減らして打たれた。重苦しい雰囲気の中、勝負に賭ける天才棋士のすさまじいまでの気迫が伝わる。なお、文庫本には棋譜が付いているので、石をならべると、いっそう趣き深い。

以上私なりの読書の楽しみを紹介させて頂いた。学生諸君も、いろんな読書の楽しみ方をしていると思う。ここで、自分自身の読書について、どんな読書をしているか、ちょっと振り返ってみることをお勧めしたい。きっと、新たな読書の魅力や楽しみ方に気づくと思います。



特 集 おすすめの一冊

学生、教職員の皆様の「おすすめの一冊」を特集しました。素敵な本がめじろ押しです。どの一冊から手にとるか。それはあなた次第です。



アレックス・シラー著、金原瑞人訳
『チョコレートアンダーグラウンド』（求竜堂）



健康促進のためにチョコレートをはじめとしたお菓子・ジュース等が法的に禁止され、国中からお菓子が消えて行く。それに立ち向かっていく人達の物語です。最初に反乱を起こすのは子供たちですが、それが多くの人々を動かしていきます。お菓子を食べることは逆行行為であり刑に処せられますが、それでも我慢できずにお菓子の密売までするなど現代では考えられないようなユニークな内容がいっぱいで、ディズニー的な印象を受けました。ユニークだとは思いますが、もしもこんな法律が日本でできたらと考えるとゾッとします。絶対絶対、途中でチョコレートが食べたくなくなります！

（情報工学科3年 岡本 麻美）



司馬遼太郎著『街道をゆく—中国・閩のみち』
（朝日新聞社）



中国の「人民解放軍」を標準語（北京官話）では「レンミンチュファンチュン」と発音するそうだが、南の福建省あたりではこれを日本語そっくり「ジンミンカイフォンゲン」と発音するという。司馬遼太郎は「街道をゆく—中国・閩のみち」の書き出しに、この話を紹介し「閩に向かう旅のはなむけには、いい話を聞いた」と書いている。閩とは今の中国福建省あたりである。「街道をゆく」は日本全国あるいは海外を巡り、その地の風土や歴史を作者独特の史観でとらえた紀行文の数々であるが、総数で50編にも上る作品群の中で特にこの「中国・閩のみち」をお勧めの一冊とするのは、この中で古代から中国を代表する船であるジャンクについて、作者の卓抜した見解が展開されているからである。中国のジャンクは

今では古めかしい「帆かけ舟」のように思われるが、福建省泉州で発見された13世紀のものは、すでに堅牢な水密隔壁を持っており、その設計思想は西欧諸国を数百年はリードしていたと言えるのである。水密隔壁とは船体の内部を枅を並べたように堅牢な壁（水密隔壁）で仕切り、一箇所でも浸水しても沈没しないように配慮された構造様式である。西欧では20世紀になってもあのタイタニック号が、不十分な水密隔壁のためについには沈没に至っていることを考えると、ジャンクの構造がいかに先見的であったか納得できるのである。一読をお勧めしたい。（商船学科助教授 児玉 敬一）



夢枕 獏『陰陽師』

（文藝春秋社）



これは平安、雅な文化の中まだ夜が闇で鬼がいた時代。朋友・源博雅と陰陽師・安倍清明が様々な妖（あやかし）と関わっていく物語です。どこまでも真っ直ぐな博雅。彼は秀でた武芸者で稀代の笛の名手でもあり、感情豊かな“いい男”です。それに対し、端正な顔にいつも微かな微笑みを浮かべたまの清明は“狐の子”と噂されるほどの天才陰陽師。何事にも動じず、何を考えているのか読めません。そんなまったく違う種類の2人ですが、深く結ばれた友情は物語の中で月のように輝いています。ゆるゆると漂う独特の雰囲気のある文章はまさしく雅。光の当たらない暗がりを淡々と進んで行くような話は決して派手ではありません。しかしついつい引き込まれてしまいます。ぜひ一度皆さんも清明の呪（しゅ）に掛かってみては如何でしょうか。

（情報工学科4年 池田 優子）



DARREN SHAN著『ダレン・シャン』（小学館）



友人の命を救うために、バンパイアになってしまうダレン少年の物語。数奇な運命をたどっていく主人公の冒険や不思議な世界が、予想もできぬ展開で繰りひろげられる英国のミステリー小説です。児童書なので活字が苦手な人でも簡単に読めるものだと思います。

（情報工学科5年 小原 貴子）

IAN CALDWELL & DUSTIN THOMASON 著 『THE RULE OF FOUR』(Dell Paperback 版)

これは二人のプリンストン大学の学生が、謎の本『Hypnerotomachia Poliphili』(夢におきる愛のためのPoliphiliの戦い)の秘密を解き明かそうとして、様々な“怪”に遭遇する話です。謎の本の内容は、500年前のルネサンス時代を舞台にしたもので、暗号化されています。ルネサンス王子の秘密や裏切りといった、クモの巣のように張り巡らされた妄想の世界に翻弄される二人の学生は一体どうなるのか…ドラマのように次から次へと話が展開していきます。特にダン・ブラウンの小説が好きな人にお薦めしたい一冊です。

(電子機械工学科3年 シャズワニ)



宮沢賢治『注文の多い料理店』(新潮文庫)



作者は「雨ニモマケズ」の詩で有名な岩手の童話作家です。知っている人も多いかな。この本には、「注文の…」の他、「雪渡り」「なめとこ山の熊」といった短い童話が19編収められています。なかでもオススメなのが、ちょっとマイナーだけれど「ひかりの素足」。

心にズンと響きます。中身はあえて言いません。生きることがちょっとだけ重くなった時、チョコレートをを用意してこの童話を読んでみて下さい。あ、チョコ食べるのは読んだ後ね。

川崎敏和『バラと折り紙と数学と』(森北出版)



これはただの折り紙の本ではありません。しかもこの本の著者は佐世保高専の先生です。川崎先生の「バラ」は“KAWASAKI ROSE”として世界的に知られ、なんと先生は、折り紙で博士号を取得した、正真正銘の折り紙博士なのです。折り紙と数学理論がどのように関連するのか、

数学好きの人は必見です。数学が嫌いな人も、この美しい薔薇を一度折ってみませんか。感動しますよ。

芥川龍之介『侏儒の言葉・西方の人』(新潮文庫)

みなさん“お笑い”は好きですか。今、若手お笑いブームですね。世の中を皮肉るネタで人気の芸人さんも結構います。そんな皮肉ネタが好きなあなたにオススメするのがこの一冊。あの芥川賞の芥川が、芸術、政治家、日本人、女の顔、悪魔、トルストイ、作家…といった“大物”を、バッサバッサと切っていきます。一流の頭脳から繰り出される一流の毒舌を、ぜひ味わってみて下さい。



茨木のり子『自分の感受性くらい』(花神社)



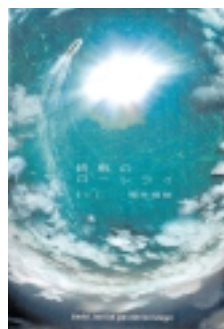
初めてこの詩を読んだ時、どきとした。自分の甘さに、弱さに、そしてそれらがすべて「おろかさ」であることに。自分の心を守るということは、他人のせいにするのではない。「ばさばさに乾いてゆく心を／ひとのせいにはするな／みずから水やりを怠っておいで」…続きを知りたい人は、

この詩集を手にとってほしい。ふとした心の隙間に一滴、澄みきった水が染みこむだろう。

(以上4編 図書委員会教員)



福井晴敏『終戦のローレライ』(講談社)



第二次世界大戦中、敗戦への道へと進む日本。軍はこれを覆すため、アメリカ軍から攻撃を受けているドイツ軍特殊潜航艦“ローレライ”の回収作戦に招集された折笠。回収したローレライで折笠は一人の少女と出会う。ローレライに隠された秘密とは？アメリカの思惑とは？軍

上層部の真意とは？ぶつかり合いながらも強く繋がる男達の熱い絆を描いた作品です。映画にもなっています。図書館にあるのでぜひ一度読んでみて下さい。

(商船学科4年 村上康義)



小川洋子『博士の愛した数式』（新潮社）



主人公は、一人息子をもつ家政婦。彼女が派遣されることになったのは、事故のために記憶が「80分しかもたない」天才数学者。博士の記憶は事故にあった時から、その蓄積をやめてしまった。そのため忘れてはいけなことをメモし自分の背広に留めている。そんな彼はコミュニケーションの媒介として数字を用いた。物語はこの老学者と家政婦に息子が加わり、数々のエピソードとともに展開していく。そして題名が示すようにひとつの「数式」が提示されることになる。ところで、博士の愛したものは数式のほかに、たぶんいくつもある。あなたはどれだけ見つけれられるだろうか。

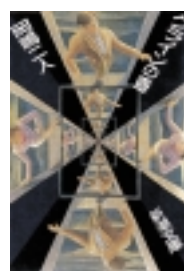
野沢尚『反乱のボヤージュ』（集英社）

この小説を読むと、大学に入学した頃の自分を思い出す。当時、私は自由と無責任の意味を履き違えていた。物語の舞台は知名度ナンバーワン大学の学生寮。そこでは長年、大学側の「廃寮キャンペーン」に対する闘争が行われている。そのなかに登場する寮生たち



も、やっぱり自由と無責任を、ちゃんと履き違えていた。そんな学生寮に「大人」の舎監が入ってきて、行動する自由とその結果に対する責任を示してゆく。と、今の自分が読んでも耳が（というより目が）痛い。その意味からも、一読をお勧めする。

岡嶋二人『クラインの壺』（新潮社）



最近、新しいゲーム機が続々と発売されている。だが、この本に登場する新感覚のゲーム機（といっても試作機だが）は、まだ開発されていない。ゲーム機「K2」の特徴は、なんといっても服を脱いで裸になってプレイすることだ。普通のゲームは目と耳を通じて情報を伝達するが、K2は皮膚から直接情報を吸収させ、完全な疑似体験を実現する。この究極のバーチャルリアリティはやがて、現実とゲーム世界の境界をかき消してゆく。虚構との交錯により真実が揺らぐ恐怖を体感してほしい。

（以上3編 商船学科助手 野々山和宏）

学生に図書館を活用させる授業—（アンケート調査結果）

図書委員会は平成17年5月に教員に対して「学生に図書館を活用させる授業等に関するアンケート調査」を実施しました。その結果17名（約30%）から回答があり、概要は以下のようになりました。

現在、学生に図書館を活用させる授業等を実施していますか？	はい 24%	いいえ 76%
過去に、学生に図書館を活用させる授業等を実施したことがありますか？	はい 44%	いいえ 56%
今後、学生に図書館を活用させる授業等の予定がありますか？	はい 38%	いいえ 62%

図書館を活用させる授業等の主な内容は、工学実験などにおける下調べや報告書作成、HRを利用した読書などでした。また、図書館への要望は、利用頻度の高い書籍類はできるだけ新版に入れ替えて欲しいといったものや、英語に親しませる英語本や図解が豊富な物づくり本を充実して欲しいといったものでした。図書委員会ではこれらの要望を十分考慮に入れて書籍類の充実に努めていきます。アンケートご協力ありがとうございました。

図書館利用状況

（平成16年度）

※ 網がけ 内は時間外利用

(1)入館者数

事 項	合 計
学 生 (人)	15828 3228
教 職 員 (人)	1445 76
学 外 者 (人)	369 136
計 (人)	17642 3440
開館日数 (人)	240 246
一日平均 (人)	70 14.6

(2)館外個人貸出者数

事 項	合 計
学 生 (人)	1488 255
教職員 (人)	196 18
学外者 (人)	68 11
計 (人)	1752 284

(3)館外個人貸出冊数

事 項	合 計
学 生 (人)	2433 404
教職員 (人)	505 35
学外者 (人)	232 21
計 (人)	3170 460

(4)図書貸出状況（分類別）

分類別	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	その他	合 計	貸出日数	1日平均 貸出冊数
	総 記	哲 学	歴 史	社会科学	自然科学	工学技術	産 業	芸 術	語 学	文 学				
合 計	187 30	54 2	57 15	211 36	238 39	1257 196	56 1	56 9	95 12	958 120	1 0	3170 460	240 246	13.2 1.9
百分率 (%)	5.9% 6.5%	1.7% 0.4%	1.8% 3.3%	6.7% 7.8%	7.5% 8.5%	39.6% 42.5%	1.8% 0.2%	1.8% 2.0%	3.0% 2.8%	30.2% 26.0%	0.0% 0.0%	100% 100%		



専攻科コーナー

— 新たに設置 —

平成17年4月に専攻科（生産システム工学専攻）の授業が開始され、また平成17年10月からは専攻科（海上輸送システム工学専攻）の授業も開始され、弓削商船高等専門学校専攻科の車の両輪とも言える二つの専攻科がスタートを切りました。記念すべき専攻科第一期生18名は、教室での各種授業や各研究室での研究にいらしています。

図書館では、さらに高度に専門化して行く授業や研究をサポートするため、開架書棚に専攻科コーナーを設置しました。専攻科の学生指導にあたる教員からそれぞれの授業や研究に参考になる書籍・文献を推薦していただきました。選定は「より広い範囲で」ということを前提にお願いしたため、洋書を中心に幅広い分野からの参考書籍が集められています。

予算の関係もあり、また、注文しているけれどもま

だ届いていない本もあり、現在の冊数はまだまだ充分とは言えませんが、興味深い本が揃っています。専攻科コーナーとなっていますが、本科の学生も自由に利用することができます。今のうちから洋書に親しんでおくことも大切です。辞書を片手に面白そうなタイトルの本を見つけて、早速ページをめくってみましょう。これまでと違った世界が目に飛び込んでくることでしょう。



— 編集後記 —

図書館だより第10号をお届けします。第1号が発行されてからちょうど10年目ということになります。第1号が発行された1996年（平成8年）は本校の五年生は小学校の五年生、一年生は小学校に入学した年でした。全国の小学校や中学校では腸管出血性大腸菌O157による食中毒が多発して多くの犠牲者が出てしまいました。2月には北海道の積丹半島にあるトンネルで落盤事故が発生して20人の方が亡くなっています。8月にはアメリカのアトランタで夏のオリンピックが開かれましたが日本は不振で、金銀銅あわせても14個のメダルしか取れませんでした。あまり良い事のなかった1996年でしたが、あれから10年、ともかくも図書館だよりは無事に発行を続けることができました。今年の特集「おすすめの一冊」はいかがでしたか。どれも面白そうで、あれもこれもと読みたくなったことでしょう。図書館だよりはこれからも皆さんがもっともっと本や図書館に親しめるためのお手伝いになるように作って行きたいと思っています。とりあえずは次の10年を目指して頑張りましょう。図書館だよりをよろしくお願ひします。